

Investors Experience *with EB-5 program*

投資参加者インタビュー



American Life Inc.
Immigrant Investment Visa Program



American Life Inc.
www.amlife.us
TEL : 206.381.1690

アメリカンライフインク
www.amlife.jp
TEL : 03-6871-9479



いった有名セレブを目にする機会も少なくない。
近所の私学に通う子供たちのクラスメイトには、誰もが知るハリウッドスターの二世もいるようで、同じくビバリーヒルズに豪邸を構えるそういったハリウッドセレブ主催のホームパーティーにも顔を出す機会がある。広大な敷地を幾重のゲートをくぐり母屋へ向かう様子はまるで映画の世界そのものようだったと話してくれた。

アメリカに渡り、現地校に通わせることとなった当時九歳の長男は、無理のないよう、まずは二グレード下げてからのスタートだった。多言語習得は九歳がピークと聞いていたとおり、初めは友達とのコミュニケーションにおいて、それなりの苦労もあったようだ。しかし日本の算数教育のレベルはアメリカに比べ

とても高いと言われるとおり、転入当初から算数ではクラスメイトから一目を置かれる存在となった長男は、少しずつ友達も増え、十九歳となった今では学校生活が楽しくてたまらないようだ。

現在七歳になる次男はアメリカ生まれ。日本に帰省した際には、日本人はとても礼儀正しくてご飯も美味しいねと、大喜びだったそう。

そんな風に日本の魅力というものを改めて認識できるのも、他の国への移住者ならではの特権といえそう。

辰巳さんが参加したスタジアムイノベーションセンタービルプロジェクトは、アメリカンライフが本社を構えるシアトルダウンタウンの南、SODO(ソド)地区にある。当時イチロー選手が快進撃を続けていたシアトルマリナーズ球場直ぐそばという立地。ニューヨークブルックリンを彷彿とさせるような港町シアトルにマッチした煉瓦造のシックレトロな外観とは一転、エコ意識が高く自転車通勤を好むシアトルワーカーのニーズを捉え、建物内には通勤エクササイズで二汗かいたワーカー達の汗を流すシャワールームを備えるなど機能的だ。

借入れを最小限に抑え長期的なリターン獲得のち、物件売却などによるキャピタルゲインを狙うという、不況に強い投資物件を提供するのがアメリカンライフの得意とする投資ストラテジー。辰巳さんの参加したイノベーションセンターもそんな長期投資を前提としたエキイティタイプの投資物件

辰巳様のケース

1531 スタジアムイノベーションセンタープロジェクト

ロサンゼルスビバリーヒルズ、世界のセレブリティが集まる高級住宅地として知られるその土地に、辰巳さんのご自宅はある。

二十代の頃、ロサンゼルスとシアトルに留学し、カリフォルニアとニューヨーク州で宅建にあたるライセンスを取得した辰巳さんは、いずれアメリカでも実家の家業であった不動産ビジネスの展開という思いを胸に秘め、EB-5プログラムで永住権の取得を決めた。

永住権取得についてインターネットなどで色々調べてみたものの、当時はまだEB-5投資永住権プログラムに関する情報はとても乏しかったと話す辰巳さん。

このプログラムを知ったときには「もうこれしかない」と参加することに迷いは無かったようだ。

当時年に何回か開催されていたEB-5プログラム説明会に参加した辰巳さんは、出席者の人々の熱心な質疑応答にこれほど同じようにアメリカ移住を希望する人たちが居たのかと、高揚感を覚えたという。

EB-5プログラムの永住権申請を行った二〇〇八年当時、未だ世界的に見ても今ほど参加者が多くなかったため、移民局

での審査もとてもスムーズで、申請から約二年後には大使館面接を終え、永住権を手にとることとなった。

ほどなくして辰巳さんご夫婦は九歳と三歳の子供達を連れ一家でロサンゼルスに移り住むことになる。

ロサンゼルスでの生活も一息ついたころ、元々不動産が専門の辰巳さんはビバリーヒルズにある住居の購入を決めた。以前ハリウッド女優も住んでいたという小高い丘の上にひっそり建つその邸宅は、天窓から差し込む柔らかな日差しにつつまれた落ち着きのある素敵な佇まいだ。

もちろん、ビバリーヒルズとあつて日常生活の中にもハリウッドやテレビドラマに出演する俳優や女優、ユースキャスターなどと



だった。

二〇一〇年の竣工以来、フェイスブックの子会社や某大手企業のデータセンター、ソーシャルセキュリティオフィスといった安定企業や公共事業が入居し、年間4%程度のリターンを誇る優良物件だ。

アメリカ移住後しばらくして、シアトルにも訪れ実際に物件も見た辰巳さんは、その立地の良さと将来性にとっても安心したようだ。やはり百聞は一見に如かずということだろう。

そして迎えた二〇一七年、アメリカンライフでは史上二例目のエクジティブプランとして、物件を担保に銀行からリファイナンスを行うことで、希望投資家に投資元本で投資権利を買い戻すキヤッシュオペレーションを提供した。

このオペレーションでは投資継続により更なる長期投資も可能である一方、EB-5により既に永住権を取得した継続投資家に明確な出口を提供する形となった。これによりこの物件にEB-5として参加していた辰巳さんを含む日本人投資家の多くが晴れて元本償還という出口を迎えることとなる。

思いもかけずこのタイミングで償還となった辰巳さん、まだまだ子供たちの教育費もかかるので助かった、と話す。アメリカの私学はとて高額で、担任の先生にもしばしばギフトカードなどを御礼として渡しておかないと子供のケアにも直結することもあるという、そういった現金主義なところも資本主義大国たる所以のようだ。



奥様の幸子さんの話では、アメリカは日本と比べて食べ物豊富だと感じる人が多いのだそう。やはり食品自給率の高い国ならではの知らない。

一昔前までは、添加物にまみれ食の安全が危惧されているイメージもあったかも知れないが、アメリカは今空前のオーガニックブームを迎えている。

スーパーマーケットには最先端のオーガニック食材が並び、安価でクオリティーの高いものもいくらかでも手に入るといって、やはりアメリカという国は無数の選択肢に溢れた国ということに違いはないだろう。

日向様のケース

1501 シアトルホームプレートセンタープロジェクト

最初に日向(仮名)さんにお会いしたのは十年程前に少人数を対象としたEB-5プログラム説明会のこと。

大雨の中ご家族で参加され、とても熱心に相談されていたことを覚えている。

日向さんは幼少の頃からジュニアオリンピックや世界大会等数々の大きな大会に出場してきた経験を持つ根っからのアスリート気質だ。大学を卒業後、家業で不動産業を営んでいたこともあり、大手建設会社の不動産部門に総合職として入社した。当時女性の社会進出が船出を始めた矢先であり、ましてや不動産や建設といった業界は男社会の最たるものだ。三年間しっかり勤め上げた後、後継者としてお母様の築いた礎を引き継ぐべく、家業の建設会社に入社する。

後継者と言っても、自分の将来は自分で築くもの、という信念のお母様は彼女を特別扱いなどしない。日向さんはがむしゃらに仕事に取り組んだ。

物おじしない男勝りな性格の彼女は、頻繁に工事現場にも出向き、職人さんでも及び腰になる高く組まれた足場を軽々とのぼっては周囲を驚かせていた。

馬車馬のように猛烈に働いているうちに、次第に経営者候補

としてもめきめきと頭角を現し、若くしてお母様の築いた礎を引き継ぐことになる。

順風満帆に見えた日向さんだが、実は体に大きな爆弾を抱えていた。

現在の医療では完治が難しいとされる難病に罹患していたのだ。寒暖差の激しい日本の気候では血の巡りが悪くなる症状が度々出現し、無理が効かなくなってくる。

更に激務が続いたせいで、重症胃潰瘍を発症し長期入院となってしまう。

このままでは日向さんの体がもたない。そう考えた彼女の家族はハワイへの移住を薦めたという。アメリカ中部に留学経験のある妹さんは、留学当時に受けた人種差別の苦い経験から、アメリカに対してはあまりいいイメージは抱いていなかったという。

しかし日系人の多く住むハワイなら話は別、安定した気候やハワイのゆったりとした雰囲気はきっと企業戦士気質の彼女の心と体を癒してくれるに違いない。

そうして知人からたまたまEB-5の話聞き行きたいのが、当時年に何度か開催していたアメリカンライフのEB-5

プログラム説明会だ。

説明会に出席した時、これは良く出来たプログラム、不動産業界の人間として、アメリカンライフの投資物件の魅力を直感的に理解できたという。すぐにでも参加に踏み切りたかったが、彼女には会社を清算し、家族のような存在の従業員たちにその先の道を用意するという大きな使命が残されていた。

お母様が立ち上げた会社は日向さんの手腕により成長に成長を続け、地元では知らぬ人はいないほどの規模の会社になっていた。彼女は体に爆弾を抱えながらも、会社清算に奔走し二年後ようやく全ての準備が整う。その頃には説明会の際に紹介を受けたシアトルマリナーズ球場近くの大型商業ビル「ホームプレートセンター第一期 北棟」は完売していたため、新たに募集開始となった南棟の第二期に参加する事になった。「アメリカンライフさんは丁寧に分かりやすく説明してくれて、しっかり対応してくれていたので、迷いも不安もありませんでした。」と話す日向さんは、基本的に永住権を投資元本で買うという感覚でチャレンジ、収益よりもまずは永住権が取れるのかどうか、その点に重点を置きプログラムへの参加を決めたと言う。

申請も順調に進み、I-526認可を経て大使館面接日が決まる。

大使館面接に向けて、永住権取得のための最終的な健康診断についても予約完了。

いよいよEB-5プログラムにおけるプロセスでの永住権の最終

段階にさしかかり、あと二歩で念願の永住権に手が届く。

そんなある日のこと、夢にも思わなかったDV抽選永住権当選の通知が届く。

「もうEB-5プログラムでも永住権取れたのに：まさかダメ元で応募した宝くじがこのタイミングで当たるなんて！」

にわかに信じがたいことではあったが、一度当たれば条件付き期間が設けられていない抽選永住権の方が長い目で見ると申請が楽という利点もあり、申請を切り替え晴れて永住権者になった。

「DV抽選永住権は国籍などのバラつきを抑えるための政策で、完全にロタリーだと思っていました。永住権手続きの時には自分と同じ年代の女性が何人もDV手続きのためのオレンジの封筒を持って並んでいたの、公正と言いつつ一定の基準でのセレクションなのではないかと感じたくらいです。」と笑顔で語る日向さん。さて真実はいかに：

めでたく抽選永住権に当選し、永住権を取得された日向さんはその後もアメリカンライフの物件に一般投資家として投資を継続することになる。

そして二〇一八年、アメリカンライフとしては三件目となる大きなキャッシュイベントを迎える事になる。投資物件ホームプレートセンターの参加投資家に投資元本を償還するエクジツトプランを実施したのだ（希望者は投資継続も可）。

「永住権を買ったつもりで投資していたし、元々長期投資と聞いていたのでまさかこのタイミングで元本が戻ってくるなんて

凄く驚きましたよ。

私はたまたま目前で抽選永住権が当選しましたが、あのままでも永住権は取れていた段階だったので、やっぱりアメリカンライフは改めて凄いなと思いました。」と話してくれた。

ハワイへ移った日向さんはその温暖で安定した気候の中で次第に体調が回復していく。

今ではとても体調が良いようで日本に居るときには欠かせなかった薬の服用も不要なまでの回復をみせている。

ハワイにいとインフルエンザのようなウイルスが存在しないせいか、滅多に風邪もひかないようだが、逆に日本からの来客時に日本から持ってくるお土産ウイルスにはめっぽう弱いそうなので、空港へのお迎えにはマスクが必需品となるようだ。

移住後しばらくしてハワイ州のライセンスを取得し、現在も不動産業に従事する日向さんは、「私は根っからの仕事人間なんです！」と断言する。

リラックスした穏やかな生活を求めてハワイへ移ってきたはずの日向さんだが、今では顧客の紹介が紹介を呼び、毎日何百通のメールを処理しながら毎晩深夜まで働くという、相変わらず多忙な日々を送っているという。

しかしその表情はとてもいきいきと明るく輝き美しい。



長澤様のケース

255シアトルエンバシースイーツホテルプロジェクト



お子様のより良い教育環境を求めアメリカに渡り、キンダーのころからハワイの名門スクールに通わせていたという長澤さん(仮名)。F1ビザ、H1Bビザ、E2Bビザとアメリカに長期滞在できるビザをひととおり経験し、最終的にEB-5投資永住権プログラムに行き着いたという。

「Eビザを維持するためにビュティサロンのオーナーになったりしましたが、異なる文化を持つ現地スタッフを使つての経営は本当に大変でした。もつと早くEB-5に参加すれば良かったです。」

そう話す長澤さんは、二〇一〇年ごろからアメリカンライフが紹介するEB-5プログラムの検討をはじめ、四年越しに参加を

決めた。

奥様と二人のご息は別の滞在ビザでハワイでの生活を送りながらEB-5の永住権申請を行い、無事永住権の取得に至る。そして二〇一七年、ワシントン州シアトルへと移り住んだ。

サッカーが大好きなご息たちは、サッカー人口がとても多く盛んなこのシアトルがとても気に入ったそうで、毎日楽しく学校に通っているようだ。

「ハワイの学校へは二時休学ということにして、シアトルはお試しで来てみたのですが、とにかくシアトルには強豪チームが多く、ハワイと比べるとサッカー環境が本当に素晴らしいんです。そういった点を子供たちが痛く気に入って、シアトルに引越すことになりました。」

シアトルはサッカー環境もさることながら、治安も比較的良好公立校でも教育レベルが高いことで知られている。その住みやすさと教育環境の良さから、全米の中でも住みたい街ランキングで常に上位を獲得するほどの人気の都市だ。

更にアメリカの公立校には、ギフトドに該当する教科ごとに飛び級制度が設けられている。

領ける。

長澤さんは現在シアトルのアメリカンライフの本社からもほど近い、ダウンタウンスタジアム地区に二〇一八年三月にグラントオーブンした四つ星ホテル、ヒルトンエンバシースイーツホテルプロジェクトに投資参加中だ。

完成前は建設現場にも何回か足を運び、近隣のアメリカンライフの投資物件も色々見て回ったという。

現在も実際の投資物件やアメリカンライフ本社からも近いところに住んでいるため、こまめに進捗が確認出来てとても安心だと話す。

「先日、ハワイから友人が訪ねて来た際に、投資物件のエンバシースイーツホテルに泊まって

もらったら、とても良いホテルだと

好評でしたよ。」と、実際の

ホテル宿泊者の評価も上々のようだ。

今回も、ホテル内に

あるサーティーンコインズ

というビストロでお話

を伺ったのち、ホテルの

コーナースイートルームの

内部をご案内した。

モダンシックな内装のその

個々の進度に合わせた教育を受けられるため、そんな理想的なアメリカでの教育環境を求めて、EB-5プログラムへの参加を決断されるご家庭も少なくない。

「ハワイだと気候的な良さがあって、日系人が多いので安心して住みやすい利点がありますが、本土は何というか、とにかく広いんです！自然も豊かで、実際に住んでみるとやはり本土には本土の良さがあると感じてます。」と話してくれた。

特にシアトルはエメラルドシティと呼ばれるほど、美しく豊かな自然に囲まれた都市だ。

北緯四七度と高緯度の割に温暖な海洋性気候で、雪も減多に降らず過ごしやすい。

コンパクトながら機能的な中心部から一歩離れば、富士山より高いマウントレーニアがそびえ立つ広大な国立公園があったり、ピュージェットサウンド湾に点在する美しい島々があったりと、スケールの大きなレジャーが楽しめる。

アメリカの国鳥でもある白頭ワシや、野生のシヤチに遭遇したりもするというから驚きだ。

休日はサッカーの練習試合の遠征で色々なところへ出かけているという長澤さん。

広大なアメリカだけに、どこの会場へ行くにも車で数時間の運転は当たり前のようだ。

アメリカの国土は日本の約二十五倍、シアトルのあるワシントン州だけでも日本の面積のおよそ半分の大きさと聞けばそれも



角部屋のスイートからは、西側にシアトルピュージェット湾とダウンタウン、南側にはリンクフィールドと呼ばれる、サッカーとアメリカンフットボールチームのスタジアムが臨める。

「このリンクフィールド、サッカー観戦で息子と何回か来たことがあります。こんなに目の前だなんて、息子たちが知ったらきっと興奮します。」と、嬉しそうに話してくれた。

ちなみに、シアトルといえばアマゾンやマイクロソフトなどのIT企業もしており、日本でも根強い人気のスターバックスコーヒーの本拠地としても知られている。

スターバックスコーヒーもアメリカンライフの本社と同じSODO(ソド)地区に本社を構えている企業だ。

そのため、このヒルトンエンバシースイーツホテルの各部屋の中にも、本場スターバックスのコーヒーが備え付けられている。

金融関係に努めるご主人は、日本ベースの仕事が忙しく永住権申請は行っていない。

そしてようやく仕事もひと段落といったところ、今度はご主人の永住権申請についても検討を始めたそうだ。

「アメリカンライフのEB-5プログラムに投資、参加して良かったと思います。」

ご主人と同じく出産前まで金融関係企業の第一線でご活躍されていた奥様は、帰り際、これまでの母性漂う雰囲気とは少し違う、キリリとしたビジネスの顔をのぞかせていた。

藤野様のケース

1501シアトルホームプレートセンタープロジェクト

藤野さんご夫婦がEB-5投資永住権プログラムを通じてアメリカ永住権者となつてから、十年が経とうとしている。

エンターテイメントとファッションの中心ロサンゼルスで二年半ほど過ごしたのち、ハワイに移ってきたという。

いつでも新しいことにチャレンジしていく、そんな前向きな性格のご夫妻はアメリカへの移住という目標に向かい、DV抽選永住権に応募を開始する。

しかしDV抽選永住権の当選確率は宝くじレベルといわれるだけに、当選までの道は遠く、待てど暮らせどいつこうに当たる気配がない。

もつと確実に効率的な方法はないのかと、移住手段について本腰を入れてリサーチを始めた。

もともと整骨院を営んでいた藤野さんご夫妻、移住後も現地でのビジネス展開を視野に入れ、EビザかEB-5かという二つの選択肢に行きついたという。

どちらも条件によつては長期滞在が可能なビザではあるが、実はこの二つには似て非なる大きな違いがある。

EB-5プログラムの目的が移民ビザである永住権の取得であるのに対し、Eビザはアメリカでビジネスを営む期間中だけ

アメリカに滞在する

ことが可能となる非

移民ビザカテゴリなのである。しかもE

ビザ滞在中は現地従業員の数に制限が

雇用や健全な運営継続が必須で、ビザ

を維持したければ赤字に転落しようとも、自己資金で補填し続けなければ

ならないのである。つまり、経営がうまくいかず資金が底を

尽きた場合には、その時点で有無をいわずに国外退去を余儀なくされる。

例えば家族に仕事があるうが、子供が現地校に通つていようが問答無用、アメリカはそういうところには大変シビアな国なのだ。

この要件を聞き、藤野さんは迷わずEB-5による永住権取得を選んだという。

「Eビザの場合、私たち夫婦のケースでは店舗に経営者として現場に張り付くことは現実的でなく、どなたか代理の方に



店舗をお任せする形になります。そうすると余程信用出来る方でないといけない。責任の無い方にお任せして店が傾いた場合の補填を考えたら、運営は投資の専門家にお任せする方が理にかなっていると思うんです。もちろん投資なので自己責任、永住権さえ取れば見返りは期待しない、その位の覚悟で参加を決めました。」と話す。

永住権取得ののち、最初に移り住んだのはカリフォルニアロサンゼルス。

藤野さんはロサンゼルス滞在中、アメリカならではの魅力について再認識する機会がしばしばあったという。それはハリウッドしかり、アメリカンフットボールの優勝決定戦が行われるスーパーボウルやグラミー賞などといった、いわゆるエンターテインメントのレベルが本場に高いということ。本場アメリカのエンターテインメントを間近で見たとき、それはもう鳥肌必至のようだ。また、ファッションやグルメの中心といわれるだけに、ロサンゼルスには世界のグルメも集結していて、毎週のように新しいスポットが誕生し遊びにも事欠かないという。

ロサンゼルスと一言にいつても、関東平野がすっぽり入るくらいの広さというから、それも納得だ。

「そんな刺激的なロサンゼルスに比べるとハワイは本当にゆったりしていて。

でも楽なんです。日系人が多いせいかハワイの人たちはとても温かく、本土で時折感じる人種差別的な見方も殆どありませんし話す英語も優しいです。物価の高さは大変ですが、服装も楽すぎるくらい。おしゃれな洋服も売ってないし、そんな

堅苦しい洋服なんて、そもそも着ていくところがないですよ。」とにこやかに話してくれた。

ちなみに、年に二回ほど日本に帰省している奥様にとって一番頭を悩ませるのは「服装」なのだそう。

藤野さんが投資参加したEB-5投資プロジェクトは、シアトルマリナーズ球場正面玄関の向かいに二棟建ての大型商業ビルを建設し運営する「ホームプレートセンター南棟」というプロジェクトだ。

ホームプレートセンターにはシアトルの地元テレビ局キングTVや高級大型家具店などが入居し、稼働率は北棟・南棟ともに100%（二〇一九年現在）と、極めて順調に運営が続いている優良物件である。二〇一八年九月、アメリカンライフはエクジティブプランの一環としてEB-5投資家を対象とした投資元本を償還するキャッシュイベントを提供した。

このキャッシュイベントで償還プランを選択し晴れて元本償還となった藤野さんだったが、もともと長期投資物件だったため、まさかこのタイミングで元本が返ってくるとは全く思いもなかったという。

「償還プランに関する案内メールが届いた時、何かの冗談かと思いました。でも本当に口座に入金されとても嬉しいです。」と笑いながら話してくれた。

ハワイ州のライセンスを取得しマッサージセラピストとして活躍されるご主人は、今や世界的な著名人からも指名が入るほどの繁忙で多忙を極める日々を送っている。

いずれはまたご夫婦でロサンゼルスに戻ることも視野に

入れつつ、当面はハワイでの生活が続くそう。



杉野様のケース

3188
ワークロフトローンプロジェクト

二〇一一年にアメリカンライフの投資物件を通じてEB5投資永住権プログラムに参加した杉野さん(仮名)。申請には少し時間が掛かったが、永住権取得後一度は住んでみたいと思っていたハワイのホノルルに移り住む。

EB5への参加のきっかけは、長年連れ添った夫との離婚だったという。

とても日本的で厳しい家庭で育った彼女は、大学を出て大手銀行へ就職し、職場で出会った元夫と結婚による寿退社という、当時多くの日本人女性が歩んだいわゆる王道の二途をたどってきた。専業主婦になってからも、二人の子宝にも恵まれ子育てに没頭する毎日だった。そんな中いざ夫と離婚となった時、実家や親族の反応はとて冷たく辛いものだったという。

女は家を守るものだ。

そんな呪縛が重くのしかかり、二人の子供を抱えた杉野さんは日に日に憔悴し、居場所をなくしていった。

そんな折、インターネットでEB5投資永住権プログラムのことを知る。

自由の国アメリカで自分の居場所を見つけよう。

杉野さんはテレビ番組でアメリカンライフのEB5プログラムが紹介されていたこともあり、思い切ってアメリカ移民法を得意

とした事務所に相談に向かう。

参加にあたり色々迷いもあったが、申請を担当するパライガルやアメリカンライフの担当者と何度も話しているうちに、気持ちも固まってきたという。

むしろ当時の立法期限が目前に迫っていたことや、投資金ショートの可能性があったため、そこを工面することに奔走して、あれこれ余計な事を考える余裕はなかったようだ。

そうしてどうにか申請手続きを終え、数年後に見事アメリカ永住権を手にした彼女は、念願のハワイへ渡り、その後ロサンゼルスへと移り住んだ。

「ハワイは言うまでもなく環境的には素晴らしいところ。でも、サーフィンなどのマリンスポーツをやらない私には、だんだんやる事がなくなってきた。」と話す杉野さん。

どうやら都会派の彼女にはハワイののんびりしすぎる環境は少々退屈だったようだ。

ロサンゼルスに移ってから、資格を取り幼稚園で働きだした。新卒後数年働いた大手銀行以来の数十年ぶりの社会復帰だ。日本に居るころは離婚というだけで回りから白い目で見られ、肩身の狭い思いをしてきたという杉野さん。

しかしアメリカに来てみるとそんな価値観は180度激変する。

アメリカでは離婚や再婚など決して珍しいことではない。

個人が幸せであることが家族の幸せにもつながる、ただ我慢するだけが美德ではない。杉野さんを取り囲むアメリカでの環境は、そんな新しい価値観で溢れていた。

先日、同居している娘さんから、このまま一緒に暮らしていたら甘えて自分が駄目になってしまうから離れて暮らそう、と言われたという。ずっと一緒に暮らしてきた娘さんから発せられた思わぬ提案にとっても面喰ったという彼女だが、「個が輝いてこそ社会」というここアメリカで生活を送るうちに、彼女にも人の手を借りず自力で必至に輝こうとする気持ちが芽生えたのかも知れないと話す。

「あのまま日本に居たら、ただ隠れるように、子供たちにも後ろめたい気持ちで過ごしていたでしょう。私は私、子供たちもまた自身の足で歩んでいく。私にとっても色んな意味で自立の大きな一歩を踏み出すチャンスなんだと思います。」そう力強く語りかけてくれた。



杉野さんにとって価値観や生活面において劇的な変化をもたらしたアメリカ移住だったが、就職して社会に出ることで、もう一つ大きな変化があったという。

専業主婦として日本にいたころは、元夫の大変さにはなかなか気づけなかったという杉野さん。

だが実際に自身も働きに出ている今は、仕事の大変さも身に染みて理解できるようになったことで、元夫に対する感謝の気持ちが芽生えてきたのだという。

「以前は彼とは養育のことでしたしか連絡を取り合わない関係でしたが、今では健康のこととか仕事のこととか、色々話せて良き相談相手という関係に変化しました。」と話す。

自分の足で立つことで、見える世界も大きく変わってきたようだ。

同居する娘さんは、難関国家試験に向けて目下勉強中だ。

この先独身でいることも視野に、自立して生き抜くためと今後を見据えて勉強に励む。

現在日本の大学に通う息子さんも、いずれアメリカでの就職を視野に入れているそうだ。

永住権というプレミアムチケットは、未来ある子供たちにどんな選択肢や可能性を与えてくれるのだろう。

二人の子を連れ、留学経験もなかった杉野さんがアメリカ永住権取得という大きな一歩を、たった二人で決断し、前に踏み出したその偉大な勇氣に敬意を表したい。

一歩前に進める力、簡単なようで難しい。

ただ二つ言えるのは、その一歩を勇敢に踏み出せる者だけが見る事の出来る世界というものは、確かに存在するのだろう。

島崎様のケース

901ロサンゼルスマリOTTホテルプロジェクト

アメリカという国では年齢も性別も関係なく、いつでも勉強も始められるし、何でもチャレンジできる。カレッジでは色々なスクールがあつて、老若男女様々な生徒が学んでいる。そんな誰にでもチャンスのある国なんです。

多くの観光客で賑わう昼下がり、サンタモニカピアを臨むカフェでキラキラ輝く水面を見つめながら、島崎さんはいつこり笑う。

バイタリテイに溢れる島崎さんは、若いころイギリスロンドンに一年間ボランティアとして活動していた経験から、いつしか同じ英語圏のアメリカへの移住を夢見るようになる。

結婚して二人の子宝にも恵まれ、いつか家族でアメリカに渡ろう、という夫婦共通の目標を持ちながら、機械部品の輸入会社を立ち上げ、夫と二人三脚で頑張ってきた。

そんな折、夫がEB-5プログラムという、投資をして現地雇用を生み出すことにより永住権が取得できるという、アメリカの移民プログラムを見つけてきてくれたのだという。

その頃にはゼロから立ち上げたビジネスも軌道に乗り、プログラムの参加基準は十分に満たしていたが、やはり多額の投資にはリスクがつきもの。参加にあたっては、もちろん不安もあつたはずだ。だが当時の弁護士、ラリーガルや、アメリカンライフ

の担当が真摯に相談に乗って

くれたことや、

その対応の早さ

も信用が出来る

と思い参加を

決めた。

当初投資物件

として紹介されたのは、ロサンゼルスダウンタウンのマリオットホテルプロジェクトだった。二〇一四年に開業以来、順調な稼働率を誇るこのホテルは、年利約6%のリターンを分配し続けているアメリカンライフの優良開発物件の二つだ。

島崎さんも投資家を招いて行われたホテルのグランドオープニングレセプションにも参加し、とてもいい物件だと確信したのだそう。

二〇一六年に条件付き解除認可も取得した島崎さんは、その後も一般投資家として投資継続し続けている。

島崎さんにとって当時EB-5でお世話になった弁護士や、アメリカンライフのスタッフたちは、古くからの友人のような存在だという。

アメリカンライフを見つけれられて、私は本当についていた、このプログラムに参加して大正解よ。そう笑いながら話してくれた。

二人の子供を持つ母でもある彼女は、母親であつても、まずは自分自身が幸せにならないと家族のことも幸せにはできない。何ごとに対しても自分自身で責任を持って決めて行動すれば後悔なんかしない。訪れたチャンスというのは絶対逃してはダメなんです。と力強く話す。

子供との距離感も、日本に居ると母親はどうしても過保護になつてしまいがち。

私はここアメリカで、昔からの夢だった旅行の仕事に就くために毎日仕事と勉強に忙しくて、あれやこれや子供にやかましく言う暇がないの。子供に何か頼まれたりしても、今ちよと待ってねと、勉強にひと段落つくまで待つてもらつて、後でどうしたの?と聞くと、大丈夫。もう解決したよつて。そうやって子供は子供なりに解決してみようという意識が芽生えていくみたいです。母親が自分のために時間を使うことにも、自分で考えていける力を養う事に繋がる。きちんと意味があるんだと思います。と話してくれた。

アメリカという国は、とても広大で何にもない荒野のような風景でも絵になる、すごくきれいで好き。そう語る彼女は元々アートにも興味があり、いずれは世界の中心

ニューヨークに住みたいそう。

自分が二度信用したものは、とことん信じて大事にする。

そして常にチャレンジし、前に進むことを忘れない。そんな信念を持つ彼女は、いつか日本とアメリカ、そして世界をつなぐような仕事に就きたいという。

アメリカでの生活はもちろん、今の仕事も次の夢に向かって励んでいる勉強も、その全てが楽しくて仕方がない。そう語りかけてくれた力強い眼差しが、とても印象的だ。



河合様のケース

3188
ワークロフトローンプロジェクト

河合さん(仮名)ご夫婦と愛猫のYUはアラモアナにあるワイキキビュウが美しいコンドミニアムでゆったりしたハワイライフを満喫している。

今回ワイキキビーチそばにある海風が心地良いカフェで河合さんのご主人にお話を伺った。

以前奥様がロサンゼルスに住んでいたこともあり、リタイア後はアメリカなど英語圏への移住と決めていた。

このまま日本に居たところで、マイナンバーや外国資産調査なども導入され、どんな資産が監視下に入っていく。この先日本で安心して老後を過ごすことなどできそうにない、そんな危機感も海外移住に対する考えを後押しした。

当時日本でIT関係の会社を営んでいた河合さんだったが、ジパングという番組の特集でアメリカンライフのEB-5投資永住権プログラムを知り、参加を決意する。

投資物件はシアトルの償還型プロジェクト。

申請中はよくあることだが、移民局からRFEと呼ばれる追加質問が来たことで、追加のやり取りが発生したため予定より少し長く掛かったものの、二〇二六年念願の永住権が届いた。

移住先は奥様にゆかりのあるロサンゼルスも候補に上がったが、治安の問題や、車社会のロサンゼルスにおいて年を重ねていく

ことに些か不安もあり、ハワイに決めたという。

もともと都会のごちゃごちゃした感じが得意ではなく、あまり出かけるタイプでもないという河合さんには、ゆったりとした時間の流れるハワイの空気が肌に合うようだ。

ここに骨をうずめるつもりで、日本のものは全て処分し、先祖のお墓も永代供養を済ませてきたという河合さんご夫婦。

美しいサンゴ礁の海を眺めてのんびりビーチサイドを歩いたりするだけで幸せな気持ちになれるという。「とても満ち足りた生活です。」と穏やかな笑みを浮かべて話してくれた。

英語での会話は少々苦手な一方で読み書きは得意という河合さん。日常生活の中で英語で話さなければならぬときは奥様の出番、契約書など書面関係については河合さんが請け負う、といった具合にお互い役割分担しているそうだ。正に二人三脚といったところだ。

アメリカでは勤続通算十年を超えればソーシャルセキュリティポイントがたまり、メディケア(高齢者向け医療保険)や年金を受けられる仕組みとなっていて、現在河合さんも無理のない程度にパートなどをしてマイペースにポイントをためている。

一方、英語が堪能な奥様は英語を活かした職場で働いている

そうだ。

アメリカ住まいで最も悩ましいのは、医療保険ではなからうか。

アメリカでは保険がとて高く、移住者にとって頭の痛い問題である。

ところが河合さんのケースでは、とても幸運なことに奥様の職場で保険をカバーしてもらえることになったようで、渡りに船といったところだろう。

日本人のコミュニティは煩わしいので、出来るだけ関わらないようにしている、と話す河合さん。

職場の仲間など限られた信用できる人間関係で平和に暮らす。

これは無理なく上手な人付き合いの基本なのかも知れない。

そんな河合さんご夫婦も投資に不安がなかったわけではないが、最悪お金はあきらめても永住権が取れば良いという覚悟でプログラムへの参加を決めたという。

「結局そういう一歩をちゃんと自分で踏み出せる人でないと、実際に永住権を取ってアメリカに移住してから苦勞が絶えないと思います。全て自己責任ですから。」と話してくれた。

スイーツ好きという河合さん。

プレートに置かれたカラフルなケーキを見て、「妻も甘いもの大好きなんです。これ、持って帰ってあげようかな。きつと喜びます。」

朗らかに笑いながらお仕事に行かれている奥様への気遣いを忘れない。

コンドミニアムに戻り、美しいワイキキの夜景を眺めながらご夫婦と愛猫YUとの温かく和やかな家族の団欒風景が目につく。



鈴木様のケース

3188
ワークロフトローンプロジェクト

海外移住が夢だったという若くして他界したお母様の意思を受け継ぎ、相続資金を使い若干三十台前半という若さでEB-5投資永住権プログラムに参加した鈴木さん。

幼いころよりフレンチスクールに通いBBCやブルームバーグを観て育った語学堪能な彼女は、移住先を求めてオーストラリア、イギリスやフランスなど世界中の国々を旅して回ったという。

アメリカ以外にも投資永住権プログラムを実施している国や地域もあり、他の国の可能性も考えたという彼女だが、投資額が高額でビジネスバックグラウンドを求められるなど、参加基準がとても高くあまり現実的ではなかったようだ。

それに比べて、証明可能な投資資金があれば年齢や学歴、ビジネスキャリアなど不問とされるアメリカのEB-5投資永住権プログラムは、とてもシンプルに感じたという。

様々な国を旅するなか、ハワイに降り立った鈴木さんは直感的に「ここが住むべき場所なのだと感じた」という。

ハワイでの生活は思わぬ副産物がついてきた。

幼いころから酷い花粉症の症状に苦しんでいた彼女は、

レーザー手術などありとあらゆる治療を試みたが、効果は一時的で回復を臨むばかりか年々悪化の一途をたどる。次第にこのままでは死んでしまうのではないかと思うほど、重症化していったのだそう。

ところが、日本からハワイに降り立った瞬間にピタリと症状が治まったという。呼吸が出来ないほどの症状に苦しんでいた彼女にとって、それはまさに奇跡のような出来事だったに違いない。

「こんな話をしたら、益々ハワイへの移住者が激増してしまいますね。」と朗らかな笑みをうかべて話す鈴木さん。

そう、ハワイにはスギ花粉が殆ど飛んでいないらしいのだ。

「私が海外移住を決意した理由は、亡き母の意思というものもありますが、勿論それだけではありません。」

日本を離れたもう一つの理由について、日本の未来に対する大きな危機感があげられるという。

「私はまだ三十代ですが、政治も国が抱える借金を見ても

とても希望が見出せるような状況ではありませんから。それともう一つ、心に決めたことはちゃんと実現させたいと思っていて、母のように何かをやり残して死んでいくのは嫌なんです。」と鈴木さんは話す。

もともと自然な環境が好きという彼女は、ハワイの気候がとても性に合っているようで、海を眺めているだけで幸せな気持ちになるという。

若くして永住権者となった鈴木さん。ハワイでの交友関係は一風変わったもののようで、同年代の多くは学生ビザで来ていることが多いため、生活時間帶的にあまり知り合う機会がないという。現在彼女を取り囲む友人はハワイ育ちの二十代前半の方、その親世代の五十代の方たちと実に幅広い。

「自分の世代の友人が居ないなんて面白いですよね。」と、にこやかに話す。

確かにアメリカンライフのEB-5投資家の主な年齢層は、その投資額から四十〜五十代やそれ以上が圧倒的に多いのは自然なことなので、同じ境遇の同年代とは巡り合うチャンスは非常に少ないのかもしれない。



投資物件である償還型のプロジェクトからのリターンという不労所得を受け取りながら、子供の頃にお母様から伝授された投資スキルを活かし時には為替トレーダーとして、また時にはパートタイマーとして、永住権者には引く手あまたの職を転々としながら、ハワイライフを満喫されているようだ。

田中様のケース

2444 ファーストアベニュープロジェクト

“幸運の女神は前髪をつかめ”

永住権者としてシアトルに住む田中さん(仮名)は、この言葉を常に心がけている。幸運の女神には後ろ髪はない、迷っていないのは絶好のチャンスも取り逃がしてしまうという意味だ。これまで幾度となく直面してきた人生の分岐点を、この言葉を胸に進んできた。

国際線パーサーとして長年大手航空会社に勤めていた田中さんは、いつかはアメリカに住みたいという気持ちで次第に強まっていたという。きっかけは、高校時代にアメリカへの留学経験があったことだが、仕事を通じて世界を飛び回っているうちに“国境”という概念が取り払われていく。日本人という枠に囚われない“地球人”という意識。結婚後一児の母となった田中さんはやがて子供の将来のためにも日本を離れ教育環境の優れたアメリカへの移住を決意する。

ただ、いざアメリカに住むと言っても一体どうしたら住めるのか。家族や企業からのスポンサーも望めず、永住権や就労ビザの可能性は低い。そうになると、限られた選択肢の中考えられるのは親子留学という方法だった。さっそく留学地の下見のためアメリカに渡る。訪れたのは住みやすいと評判のシアトル。子供の将来を考えると、住むなら全米でも特に教育水準の高い

シアトルかカナダのバンクーバーという考えがあつてのことだ。

そんな折、シアトルでたまたま立ち寄った書店で一冊の本を見つけた。アメリカへの移住方法について書かれた指南書だった。その時田中さんは投資により永住権を取得できることを知る。“EB-5(イービーファイブ)投資家永住権プログラム”である。

「そんな方法で本当にグリーンカードが取れるのだろうか。」聞いたこともない永住権の取得方法に、興味は沸いたもののその時はまだ半信半疑だった。

ところがその翌日、偶然にもアメリカカンライフの代表、ヘンリー・リーブマンと会うことになる。何気ない会話で親子留学のビザ取得を考えていると話すと、「それならEB-5でグリーンカード取った方が断然いい」とヘンリーは答えた。

そう、実はヘンリー・リーブマンこそが昨日たまたま手にした指南書を執筆した当の本人だったのだ。なんとという偶然。思いも

よらず永住権取得のチャンスの到来だ。

当時の田中さんにとってEB-5の参加投資額は決して安くはなかった。

パーサー時代、同僚がブランド品などにお金を費やす傍らで、将来のためにとこつこつ貯めてきた大切な資産なのだ、決して無駄にする訳にはいかない。

大切な資金を投資するからには、リスクや将来性もしっかり見極めなければ。

投資には素人だった田中さんだが、これを機に不動産投資について学び、自分なりの答えを出した。最終的な決め手となったのは、シアトルのソド地区という立地だと言う。投資先の

ソド地区は全米有数の貿易港として知られるシアトル湾に面している。貿易港がそばにあれば、常に“物”が動き“風”が流れているはず。

当時はまだEB-5の法律自体施行されて間もなかったため、多少の不安は拭えなかったというが、「この縁を逃したら永住権を取得するチャンスは、二度と巡って来ないかも知れない。」

田中さんは目の前に舞い込んできた“女神の前髪”を掴んでみようと決めたので

ある。

一九九六年当時、ソド地区周辺は今よりも遥かに工業地域の色が強く、スターバックスの本社ビルもセイフコマリナーズ球場も、タリーズコーヒーの本社もなかった時代だ。投資物件はファーストアベニューサウス沿いにあり、リフォーム後タイルシヨップがテナントとして入居したこぢんまりとした小さな物件だった。

ところが、程なくしてこの物件の通りを隔てた大きな敷地に、当時飛ぶ鳥を落とす勢いで急成長を遂げていたシアトル出身のコーヒーブランド、スターバックスコーヒーの本社ビルが建つことになる。

スターバックス本社とのソド地区への移転は、当時のソド地区に大きな影響をもたらした。スターバックス本社ビルや同ビルにテナントとして入居しているシアーズデパートなどに、毎日多くの人が集まるようになったからだ。

これにより周辺の地価が高騰、当初の予想を大きく上回るリターンを出し続ける超優良物件へと成長したことはいうまでもない。

念願のアメリカ永住権取得と優良投資物件からの安定収入。

田中さんは見事に“幸運の女神”の前髪を掴むことに成功したのだ。

